

2015.9.22

「聖書の『らい病』表現は誤訳明らか」

岡山の牧師、原語への置き換え求め30年 罪や汚れの象徴…ハンセン病差別を助長

●岡山県瀬戸内市の国立ハンセン病療養所「長島愛生園」内にある長島曙教会の大嶋得雄牧師（74）が、聖書で「らい病」（ハンセン病の旧称）の表現をやめて、原語に置き換えるよう求める活動に30年以上取り組んでいる。8月、これまでの活動をつづった著書を自費出版。この問題を多くの人に知ってほしいと訴える。

●大手電機メーカーの営業マンだった大嶋さんは、28歳で神学校に入り牧師の道に。昭和58年、長島曙教会に赴任した。ある日、10人ほどの入所者とともに別の教会の説教を聴きに行くと、牧師が「らい病」を罪や汚れの象徴として語っていた。「私たちは罪を犯したのか」という入所者の問い掛けに言葉を失ったという。



●大嶋さんによると、旧約聖書「レビ記」には、表面が汚れたものなどを指すヘブライ語「ツアラアト」の記述が多く登場する。人間以外に衣服や壁にも現れると記されているが、日本など各国語訳では「らい病」とされ、大嶋さんは「誤訳であることは明らか。原語通り『ツアラアト』と記述すべきだ」と指摘する。聖書の出版社に働き掛けを重ね、原語に置き換える社も出てきているが、「神様の言葉だから」と受け入れてもらえないことが多い。牧師の中にも「罪や汚れを説くのに都合がよい」との声があるという。大嶋さんは「入所者に一番近い牧師の一人として、私がこの問題に取り組まなければ」と活動を続けてきた。

●全3巻からなる著書「聖書のらいに取組んで」は、各千冊を出版。全国の公立図書館や国立国会図書館、キリスト教系の学校に寄贈する。大嶋さんは「聖書にこのような記述があると、ハンセン病への差別意識はなくなる。入所者の高齢化が進んでおり、元気なうちに『らい』の表記がなくなると報告したい」と話している。